

平成30年度 鶴岡市子ども読書活動推進委員会会議録

○日 時 平成31年1月22日(火) 午後14時～

○会 場 鶴岡市立図書館 講座室

○次 第 委嘱状交付

1. 開会 教育部長
2. 教育長あいさつ 教育長
3. 委員自己紹介(庁内会議委員等 自己紹介)
4. 推進委員会会長、副会長の選任について
5. 報告
 - (1) 平成30年度子ども読書アンケートについて 資料1 事務局
 - (2) 計画の数値目標について 資料2 事務局
6. 協議 図書館長
 - (1) 第二次鶴岡市子ども読書活動推進計画策定について 資料3
 - (2) その他
7. その他
8. 閉会 教育部長

○出席委員

樋渡美智子委員、井上裕子委員、三浦洋介委員、宮島昭子委員、五十嵐良二委員、伊藤吉樹委員、岩田瑛子委員、本間俊美委員、三浦宗平委員

○欠席委員 なし

○市側出席職員

教育長：加藤忍 教育部長：石塚健 学校教育課長：尾形圭一郎
社会教育課長：鈴木晃 健康課長(代理)母子健康係長：大川美紀子
子育て推進課長(代理)子育て推進専門員：石川誠 図書館長：松浦幸子
学校教育専門員：眞坂敦子 社会教育課専門員：河口美里
子育て推進課主事：齋藤ひろば かたばみ保育園保育専門員：佐藤裕美
図書館主査：今野章 図書専門員：船岡里佳、 図書館主事：吉住静香

○公開・非公開の別 公開

○傍聴者の人数 0人

5. 報告 (1) 平成30年度子ども読書アンケートについて
(2) 計画の数値目標について
～事務局説明～

質疑・協議

(委員)

子ども時代の読書意義、生きる力を身につけるための読書、そのための調査をしていると思うが、本を読む量と小さい頃の体験だけで成果が測れるのか。このような調査だけでは、なかなかわからないのではないか。

(図書館)

当市でのアンケートでは、報告したとおりの調査である。
全国的なところでは、文科省の委託による調査ではあるが、その中では関連性のある調査もやっている。後日、配布したい。鶴岡市の動きとして、そこまでの調査はやっていないのが実情。

(委員)

本が好きかどうかという調査は、学力テストの中の学力状況調査の中にもあると思うが、鶴岡市の場合は、そちらの調査とは別に取ったものか。

(図書館)

図書館独自で調査したもの。

(委員)

教育委員会は、どのように受け止めているか。学力状況調査との整合性とかあるか。

(学校教育課)

(学力状況調査)対象が小学校で言えば6年生のみ、中学校では3年生ということもあり、その学年における傾向は把握できるが、部分的であること、学年によって違うということ、よって関連性については、難しいところである。

(委員)

県の第三次計画のなかでは、学力調査の結果を受けた実態も出ている。
どういう対象で実態を掴むか、学校現場、調査する側の苦労もあろうかと思うが、どうすれば実態がよくわかるのか。
到達目標についても、何%にすればいいのか、(策定検討時)設定が難しかった。理想と離れたものでもおかしいが、理想は高く持たなければいけない。
これから第二次計画を作るにあたって、県が推進計画で出している実態調査と本市と、若干整合性をつけていかなければならないのでは。
傾向としては、好きか嫌いかと問われれば、月齢が低くければ好きで、高くなればだんだん読まなくなっているのは、大きな傾向としてわかる。何らかの変化があるのではないかと期待もあり、質問した。

(教育長)

全国学力・学習状況調査の項目も毎年同じものとも限らず、読書に関してもずっと調査

が続くとも言えず、(今回のアンケート調査を)本市として調査をした。

(委員)

県では、平成24年から同じ項目で調査している。好きか嫌いかということは変わっていないかと思うが、何の項目で実態を調べるのか、とても大きな課題ではないか。

(委員)

この結果を見て、読書に対して二極化していると感じる。学校でもそれが見うけられる。図書館が主催し、年に一回ではあるが図書主任会を開催している。学校図書館の運営についての研修をすることで、学校間の格差が少しでも縮まれば良いと思う。

(会長)

学校では読んでいるから、何をプラスと見るか、様々な解釈があると思うが。

(委員)

アンケートも分析がとても大切。数字だけ見て一喜一憂するのではなく、背景であるとか、なぜ二極化するのか、推察するためには各学校で行なっていることを聞き取らないと背景が見えてこない。

分析の視点もどんな立場で分析していいのか、これからどうして行けばいいのか見えてこない。分析が大事なのでは。第二次計画を作成するにあたって、この結果をどう分析するのか、時間かけてしていかなければと。

(副会長)

どうして二極化なのか、背景など、共通理解して分析しながらどうすればいいか、きめ細かく見ていかなければならない。

(委員)

学童にきている子ども達は、ゲームもないので本を読んでいる。世の中で格差があると言われるが、教育にも格差を感じている。

また、おはなし会に参加している方々を見ていると、意識が高い方が多いと感じている。読書に関しても意識が高い。図書館に足を運んでいる方は、親御さんも本が好きなのは。学校から借りてくる本を見ても、差が開いているのを感じるが、本を読めば「いい人間が育つか」とまではわからないところでもある。

(委員)

「生きる力を身につける」とは、本を読んだものを知識とし、考えて動かないと力にはなっていない。

「考えること」、「動くこと」双方を盛り込んだ計画にしていかないと。

(委員)

中学校では、数値的(調査結果)にもあるが、感覚的にも二極化を感じる。

では、本を読めないとダメかということ、ダメではないが、より豊かな人生を歩むためには、読めたら良いのでは。

そのベースになるのが、小学校時代の読書体験であり、成長と共に一度離れても、将来

的にまた読書体験につながればいいのではないか。

また、調査はできるだけ少なくして欲しい。調査される側も、する側も大変である。

(会 長)

プラスやマイナスもあるが、我が子のことも見ても小学校中学年までは、本をすごく読み、その後だんだん読まなくなり、なぜかと聞けば忙しいからと。そしてだんだんスポーツの方に夢中になっていった。

「全く読まない」という理由がなぜなのか。

中学生が(学校)図書館にいっぱい行く。司書の人に会いに行く、荒れている時代でもあったが、癒しの場所であった。本来は本を読む場所だが、こういう場としても役割があるのでは。

なぜ読まないのか、なぜ読めないのか、なぜ好きなのか、そのあたりを知りたい。

(委 員)

冊子(やまがた子育て5か条 みんなで取り組む生活習慣づくり)は、県で作成し、小学校、中学校に配布したもので、「みんなで取り組む生活習慣づくり」ということだが、読書についても、「読書によって知力の土台を作りましょう」とある。家庭学習とワンセットで考えては。

今、新しい指導要領が平行実施されているが、これまで以上に家庭学習が重要。

本を調べなければいけない、解決できない学習の課題とセットになれば、家で本を全く読まない現状はなくなる。

つまり読まざるを得ない状況が、まだまだ足りないのではないかと。

家庭学習と読書習慣、全くかけ離れた別々のものではなく、つながりがあるものだという意識を持っていただきたい。

各学校でも、家族と一緒に家で読む「いえどく」、「うちどく」、街で読む、出会う「まちどく」、学校で読む「がくどく」として、様々なところで話しているが、「家どく」がもっともっと大事になってくると思う。

どのような「家どく」をすればいいか。各学校でも工夫をしていると思うが、より広げていけるような計画になればいいのでは。

例えば、数値的な結果を見て、だめなのではなく「読まざるを得ない習慣づくり」も大事だと。

それから「楽しみ」としての(読書)習慣作りというのは、読んでも読まなくても、その人の自由であるが、教育として、読めば楽しいものだという経験をさせたい。

手立てがたくさんある。研修会を保護者と一緒にやっていければ、さらに目標に向かって有効なのではないか。

この冊子(やまがた子育て5か条)も活用し、学校でも図書館教育の中に生活習慣づくりの一つとして読書を入れ、第二次計画に盛り込んで。

(委 員)

学校の図書館では、なかには借りるだけで終わってしまう子もいる。自分の子ども(高学年)も、なかなか読まない。YouTubeやゲームが面白い。

どうしたら好きになるのか、宿題になれば良いのにと。私自身の子どもの頃など、学校で音読があったり、(現在)職場の学校でも、親子読書などがあったり、様々な取り組みをしている。

宿題(やらなければいけない環境)になればと思っている。

6. 協議 (1) 第二次鶴岡市子ども読書活動推進計画策定について 資料3
～図書館長説明～

質疑・協議

(委員)

何のために第二次計画を作るのか、これがはっきりしてないと、似たようなものをただ作り直すだけのものになってしまう。

指導要領が大きく変わっていく、学校教育が変わっていく、図書館関係で言えば改訂学校図書館法が平成27年に変わっている。

それを受けて、平成29年に県の第三次計画ができたが、その時もただ同じような推進計画を作るのではだめだと。

学校の現場では何を求めているのか、それは具体的に何をどうしたらいいのか。子ども達が変わっていく中、現場の先生の参考になるような実例などを入れていく必要がある、第三次計画(県)の役割であると策定されたものである。

鶴岡の場合も、同じように現場の先生方が、活用できるものにしてほしい。管理職の手元にあって飾られているようなものは要らない。

幼稚園、学校、地域それぞれのつながりを、どのように協力しながら進めていくか、実例をたくさん持っていると思う。

その中で、特徴的なものを集約し、県のように学校で参考になるような事例が載っている鶴岡らしい計画が出来上がっていくのではないかと。

具体的な取り組みの中に入れるか、資料として入れていく、そのような計画にすれば、現場で欲しい計画になるのではないかと。

そこを2回目あたりに確認をしてから全体の構想をまとめたほうがいいのか。

新規事業をたくさん立ち上げ、具体的な取り組みの中にあるが、その新規事業がどうなったのかわからない。こんないい結果が出たということも、載せていくといいのでは。

(副会長)

どんな第二次計画を作るのか、時期が来たからではなく、なぜ作るのかを大事にしたい。

そのためには、鶴岡の子ども達の実態、学力面、学校生活いろんな角度があると思う。

例えば、学力面で子ども達を伸ばすために、読書はどう関わって行けばいいのか。学びの面白さ、読書楽しさをどう伝えればいいのか、どう学びにつなげていくのか。

第二次計画をなぜ作るかの前に、鶴岡の子供達の実態を知る必要があるかと。

そのうえで、読書の果たす役割がないのか、各家庭で出来ること、そして幼稚園、保育園で、各園で出来ることは何か、全体で取り組むことはどんな事が出来るのか。

子育て推進課が管轄になるが、幼稚園、保育園間の交流もなかなか無い。

それぞれがやっていることを共有しながら、もっと良くするためにはどうしたいのか、教育委員会も入り、学びを深めていければと思う。

子どもの実態を踏まえながら、読書が果たす大きな力は何か、どう展開していくか。

ここにも各方面の方々がいるが、それぞれの立場で何が出来るのか、計画に沿ってではなく、(子ども達の実態)そこから計画がつくっていけないか。

例えば、先ほどあったブックスタートは、保護者の関心が高まっているとても良い例だが、7ヶ月検診だけではなく、他の検診でも何かできないか。時には親御さんに講師の先生を呼び話をするなど、様々なかたちで鶴岡市全体で読書の大切さを伝えていく。いろんな形で、具体的な推進計画にして行けたらいいのではないかと。

結果として数値は出てくるが、どういう取り組みからそうなったのか、この数字が出たのは、この取り組みが良かったからか、悪かったのか、浅かったのか、数値と取り組みが連動する第二次計画がくれたらいいのではないか。

(会 長)

例えば、親御さんが「うちの子供はスポーツで生かすから」という方もいる。「読書の大切さ」をどれだけ意識として持っているか。

読書自体なのか、読書を通してなのか、単純に考えられない時代になってきている。

(昔は) 何もないから、家に帰れば何もすることない。本を読むだけ、今は様々なものがいっぱいある環境で子どもを育てていく。大きな問題であり、課題ではないか。

(委 員)

「本をいっぱい読めばいいのか」ということもあるが、最近、ブックスタートの影響もあり、乳幼児向けのお話会に、小さいお子さんの参加が増えている。

産休中のお母さんが参加しているのか、時には(人が)あふれて困ってしまう時もある。もう少し大きいお子さん向けのお話会も、(参加者が)低齢化している。

(図書館に)小学生は自分ではまだ来られない、中高校生になると自分で来ることができる。

しかし、その年齢になると(図書館に来る子どもは)減っている。それをずっとつなげておける方法として何かないのか。

私たちが図書館に足を運ぶのは、それは本がある空間を含めて、そこに身をおくのが楽しい、そういう人達だと思う。

中高校生になっても、図書館に行っても本を借りたい、読みたいというような人に育てるには、居心地のいい空間(図書館)ということも、大事にしていかなければならない。

(委 員)

読書はとても大切だし、幼少期の体験はすごく重要。

中高校生になると(読書に関して)下がった数字になるが、まず高校生が忙しい。

そして情報が過多で、5年前、10年前、20年前と置かれている社会状況が全く違う。例えば、スマートフォンひとつ取っても状況が違う。だから第二次計画が必要だろうと思うが。

また、必ずしも活字にこだわらず、本とは何か。漫画本でもいいものもある。本(紙)に限らずタブレットやパソコンでの電子書籍という形もある。本とは何かと、考えていかなければいけない。

(委 員)

必読図書のリストだが、なかなか子ども達も読んでくれない。推薦図書のリストを新しいものに更新してほしいと現場で思っている。(取り組み) 継続とあるが。

(学校教育課長)

学校それぞれで、子ども達にこんな本を読ませたい、おすすめ図書として設定してリストを持っていると思うが、「読まなければならない」という与え方ではなく、子ども達が本を読んでみたいという「本との出会い」となるのがこのリストであって、それぞれ学校で設定していると認識している。

(委員)

以前は学校図書館協議会で(発行のリスト)各学年で決まったものがあったが、今はなくなった。古いものや、絶版になったものもあり、今は各学校で子ども達のレベル(学年)に合わせて選び、また、学校間で情報交換をしてリストを持っている。学校に任せられているところが多い。

(委員)

図書職員の研修として任意ではあるが、「購入してよかった本」として、読み物編と学習資料編として作成しているが、勤務の関係上、なかなか参加することができず、情報交換できる研修やリストを作れるような会議があるといいのでは。図書職員だけでするのは難しい。自分の中の知識も少なく、図書の選本に関わる情報がほしい。

(教育長)

春先に本の展示会があり、そこで先生方が本を選本できる環境は、今もあるのか。

(委員)

今もある。

(委員)

(私の場合)一人で参加するだけである。

(委員)

各学校の体制で、図書主任と図書担当と一緒にいくケースと学校の体制による。

計画が出来た時に、小学校では何をすればいいのか、また、どこまで(受け取る側が)見ていてくれるのか。取り組み担当のところに「学校教育課」と書いてあり、委員会でやるものかとも取れる。

各学校で、これがどのくらい取り入れられているのか、どれくらい取り組めたかという、差が大きいと思う。

点の取り組み、線になってつながっていない。次の計画では、皆さんに伝わり、さらに誰がやるのかを、明確にしなければいけない。

特に必要なのは、(学校)図書館を使用した改善ということ。

子ども達の読書記録を見ると9分類、物語がなかなか読まれていない。ただ借りれば良いという傾向が見られる。

国語の授業の中で、図書館を関連付けた取り組みをした。「ごんぎづね」のあとに「きつね」が出てくる本を、市立図書館からまた学校司書の方が活躍し、たくさん集めてもらい、2冊読んで紹介し合う授業をした。

子どもは、活動すると生き生きと紹介する。またそれを子供たちが読み出す。その後、子ども達の読書記録を見ると、9分類、物語を借りていなかった子ども達が、結構読んでいます。

今、子ども達は目的がないと読まない。目的と読む時間と読み方を教えて、そして紹介しあう活動を通し、読書が広がっていく。

ぜひ、そういうやり方があることを紹介し合わないと、これだけ書いてあってやりましようといっても難しいのではないかと。

(教育長)

(取り組み先として) 学校教育課とあるが、具体的には誰がうごくのか。学校の実態をどう捉えられるのか、組織はあるのか。田川学研としてはあるが、市として独自のものは無い。研修会も場は提供するけれども、現状把握をするところまでは至っていない。

この計画を推進するためだけではないが、学校図書館との連携が、学校教育課、図書館含めて実態把握や、その課題に対して教育委員会として何ができるのか、最初の一步から積み重ねていかないと難しい。

(会長)

データから見るこれからの動向として(本を) 読まない、(どうしたら読むようになるのか) 親同士の情報交換、交流の場、お茶飲み話ではないが、大切なのではないかと。

山形県の図書館研究大会の冊子に、「新しい図書館の多くは複合施設として建設させ、地域の活性化やまちづくりの拠点として整理される。地域づくりの実現に向け図書館員は積極的に地域出向き、図書館のニーズを掘り起こし自身の専門性を高めていく必要があるのではないか」とあるが、また別の視点で考える事もこれからは必要なのではないかと。

(委員)

読書の定義をブレイクスルーしていかないと。

「生きる力を身につけるために読む」ことから、「知識を得て、考えて動く」ということ。時代の流れ上、活字から離れている、また、活字以外のことが入ってくることを認めた計画を盛り込まないと、図書館でこの話をするのは難儀だと思う。時代には沿っていかないと。

キーワードとして、主体的というところと多様性を求めるところと、教えるのではなく、教えてもらうカタチの方向転換を相互でしていかないと。

これだけ答えがわからず、いろんなものを認めなければいけない時代に、先ほどの参考図書(リスト)で「これを読んでください」という、これがすべての答えで、逆に「おすすめの(本を) 教えてください」、に転換した方が合ってくるのでは。

次の計画は、ポイントして主体性と多様性を認めることを盛り込んだ、鶴岡独自の形が良いのでは。

(保育園)

0歳児の子ども達も本を読んでと持ってくる。中には絵本が好きということよりも、大好きな人から自分だけに読んでもらう時間、心地良い時間、それを求めてもう一回とせがむ。

愛着関係を特に大切にしている。愛着関係を深めることによって、自己肯定感が高まり、主体的な姿が変わっていくと、私たち職員は思っている。心の育ち、心の安定の一つとして、読み聞かせを取り入れている。

4、5歳児になると、字が読めるため自分で読ませたい親御さんがいるが、「お母さんとのそういう時間を求めている」と話している。

言葉を学んだり、感性を磨いたり表現力を高めたり、想像力を豊かにするというのは、心の安定や育ちの土台があって、つながっていくのではないかと。

結果は、すぐ出るものではないが、そういう風に育って行って欲しいと、願いながら子ども達と関わっている。

もちろん本の貸し出しをしたり、おたよりを出したり、どの園でもやっていることではあるが、本を読め、読めというよりも「お家の人との関わりがあつての読書」だと伝えていきたい。